

『元刊雜劇三十種』による元代庶民の貞節観

福永美佳

一 はじめに

「餓死は極めて小事であり、節を失うことは極めて大事である」（『程氏遺書』伊川先生語八）。これは北宋の思想家程伊川の言葉である。中国で、女性の貞節がこのように声高に叫ばれるようになったのは、それほど古い話ではない。これについて、澤田瑞穂氏は「南宋時代になって、民族の純潔保持の見地から、

まったとみられる。それでは、元代女性を取り巻く状況はどのようなものであったのだろうか。『大元聖政国朝典章』（正集は大徳七（二三〇三）年に、新集は至正二（一三四二）年に頒行）に記載される至大四（一三一）年八月の事例を挙げる。²⁾

婦女の貞節ということを重視する朱子派の道学が思想界を風靡するに及んで、世間の空気も硬化し、再嫁を失節の行為として賤しめ、後家を立て通した女を節婦烈女として称賛するようになった。明清時代には朱子学が国家のすべての政治・教化の規範とされたから、節婦が国家から表彰されるのはもとより、反対に再嫁の婦は誥封を申請する資格がないとされたほどである」と述べている。女性の貞節に固執する風潮は宋代以降に始まり、明清代にはいっそう強

近年以来、婦人夫亡守節者甚少、改嫁者歴歴有之。

近年以来、婦人は夫が亡くなり節を守るものはなほだ少なく、再嫁するものが明らかにいる。

この資料は元代の法律書である。ゆえに、ここに記されているのは支配する側からの見解といえよう。この例によると、元代は女性の再嫁に批判的であったが、現実には徹底されていなかったことが分かる。

下見隆雄氏によれば、宋代は「節を失う事の重大」を主張した程伊川でさえも、その甥女・姪婦ともに改嫁しており、当時は現実には世俗の風を完全変転というわけにはいかなかった³とされるが、元代も同じような状況にあったことがうかがい知れる。では、一方、支配される側の人々は女性の貞節という問題に対し、どのように考えていたのだろうか。本稿では、元代に大都（現在の北京）を中心に、庶民の間で流行した歌劇、すなわち元雜劇のテキストにもとづいて、元代の庶民女性の貞節観について論じることにはしたい。

二 『元刊雜劇』にみる貞節観念

元代の庶民に関する記録として、『元刊雜劇三十種』を用いることにしたい⁴。これは元代に刊行された戯曲テキストである。中国の戯曲テキストのなかでは、現存最古のものとして、『元刊雜劇』とも呼ばれる。『元刊雜劇』は戯曲テキストとはいえず、当時の世相や人々の価値観を伝える貴重な資料といえる。ただし歌辭は全文を備えているが、せりふやしぐさは簡略化さ

れ、成立過程など不明な点も多い。

『元刊雜劇』が収める三十種のなかに、且本（歌い手を女性がつとめる作品）が三つある。そのうち「調風月」と「拜月亭」が関漢卿作品で、残るは石君宝作「紫雲亭」である。どの作品にも異本は伝わらない。ここに登場するヒロインの立場は異なり、それぞれ「調風月」が侍女、「拜月亭」が良家出身の娘、「紫雲亭」が諸宮調歌いである。どの作品も縁談を扱っており、しかも共通しているのはヒロインが正式な手順を踏まぬまま男性と結ばれている点である。

一例をあげれば「調風月」の第二折【江兒水】のなかで燕燕が小千戸に対して次のような発言を行っている。

【江兒水】老阿者使將來伏侍尔、展汚了咱身起。
尔養着別個⁵的、看我如奴婢。

【江兒水】老婦人にあなを世話するよう任され、体を汚された。（それなのに）あなたは他の女を囲うとは、私を奴婢のようにみていたのね。

ここでは、ヒロインである侍女が、主人と関係を持ったことについて直接的な言葉で述べ、責任を取ろうとしない主人に対し、侍女である自分を奴婢のようにみていたのかと非難している。

「拜月亭」の王瑞蘭もまた第一折で、戦乱のさなか自分が生きるために「**賺煞尾**」假妝些厮取厮捨、伴做個一家一計、且著這脱身術謾過這打家賊」（仮に二人で何とかこの場をやり過ごし、一家の夫一家の妻のふりをして、この身をのがれる術を用いてこの賊どもを欺くことにしよう）と述べている。だが第二折で、生き別れた父親によって強引に家に連れ戻されそうになると、仮の妻であったはずの瑞蘭は仮の夫に対し、「**黃煞尾**」啗兀的做夫妻三個月時光、你末不曾見您這歹渾家説個謊」（我らがなんと夫婦になって三ヶ月経ちましたが、あなたはこれまであなたの悪妻がでたらめを言うのをみたことではないでしょう）といい、二人が夫婦であったことを認めている。しかも、瑞蘭は第四折の「**水洗子**」で仮の夫とは違う、父の勧める別の男性との婚約の席にも渋々ながら出

席している。

いかなる状況にあるかと、自らの判断で男性と結ばれた彼女たちの行為は、儒教的な道德観に照らせば、受け入れられるものではない。伝統的な中国の価値観では、婚姻は個人の問題ではなく、家同士の結びつきと理解され、その成立には祖父母や父母の同意が必要であり、仲人を立て、正式な手順をもって有効な婚姻の成立とみなされる。⁵「拜月亭」の王瑞蘭が自分の決めた夫を見捨て、父の決めた相手との縁談を断り切れなかったのもこのことが関係している。

このほか「紫雲亭」の第三折では「**耍孩兒**」若還俺娘知咱這暗私奔倒毒似那倒宅計、若還您爺見你這諸宮調更狠如那唱挽歌」（もしも母が、私がこっそり駆け落ちしたことを知ったら（あの李娃が実行した）倒宅の計よりも恨むでしょうし、もしあなたの父があなたという諸宮調歌いを見たら（李娃に騙され乞食となったあの鄭元和が）挽歌を歌ったことよりも辛いでしよう）とある。

このように『元刊雜劇』に収載された日本のヒロ

インは、仲人を立てずに、自分で選んだ男性と結ばれているのである。ここに女性の自我の発生をみることができる。

しかし、『元刊雜劇』には貞節に対する意識がまったく描かれていないのかというと、そうではない。「調風月」の第一折【後庭花】には次のような歌詞がある。

【後庭花】我往常笑別人容易婚、打取一千個好啼噴。我往常説真烈自由性、嫌輕狂惡盡人。

【後庭花】私はいつも他人がたやすく結婚するのを笑い、千回ものくしゃみをしたものです。私は日ごろから貞烈とは本性によるものと口にし、軽はずみに人の恨みを買うことを嫌がったものです。

この歌詞にある「真」は「貞」の意味で用いられているので、貞節がまったく意識されていなかったとはいえない。だが、儒教倫理に抵触する内容の芝居が上演されていたことから、元代は貞節への意識

が薄いと見える。

さらにこの点を明らかにするため、『元刊雜劇』と『元曲選』にテキストが伝わる岳伯川作「鉄拐李」（男性が歌い手となる末本）を比較したい。なお『元曲選』は、明の万暦四十三・四十四（一六一五―一六一六）年に臧懋循によって編纂されたもので、ここに収められる百篇の戯曲にはかなり手が加えられていることが知られる。

この話の主役は妻子持ちの岳受という名の胥吏で、評判の悪い男である。彼はあくどいやり口を長官韓魏公に見破られ、驚きのあまりに寝込んでしまう。第二折にある【叨叨令】の後のせりふの中で、今にも死にそうな岳受が、妻に向って次のように述べる。

〔旦云〕我道它支出我（去）、好歹与孫福叔叔説些話也。岳孔目、你好多心多慮。你死之後、我也大門不出便了。〔末云〕大嫂、你婦人家那里得那恒常久遠的心腸。大嫂、我数你幾件兒你便出門。〔旦云〕你（数）幾庄兒我聽。

〔妻が言う〕彼は人払いをして、やたらと孫福さんに話をしております。岳孔目、あなたは余計な心配をしすぎです。あなたの死後、私が外出しなければよいでしょう。〔夫が言う〕お前、おまえたち女がどうして長い間変わらない気持ちでいられるだろうか。お前、私がいくつか外出について挙げてみせよう。〔妻が言う〕あなたお話しください、お聞きます。

自分の死後、妻の心変わりを危惧する夫に比べると、妻はそれほど深刻に捉えていない。ところが、同じ場面であっても『元曲選』に収載された「鉄柵李」には、妻の言葉に変化が起きている。

〔旦上、悲科、云〕孔目、你怎生對着小叔叔說這等話那。〔正末云〕大嫂、這等近禮的話、我也難對你說。〔旦云〕則願的無是無非、便有些好歹、你則放心。我一車骨頭半車肉、我一馬不鞍兩鞍、雙輪不碾四轍、守着福童孩兒、直到老死也不嫁人。有你在時、三重門兒也不會出。休道你死了、我

可出門去。〔正末云〕你道你不出門去、保守着不見人的面皮、我略說幾件兒見人的勾當、與你聽者。〔旦云〕你說我聽。

〔妻が登場し、悲しむしぐさをして、言う〕孔目。あなたはどうして孫福さんに向かってそんな話をするのですか。〔夫が言う〕お前、こんな道理に近い話、お前であっても言いづらい。〔妻が言う〕何事もないことを願いますが、もし万一のことがあっても、あなたは安心してください。私は一つの骨に半分の肉、私という馬には二つの鞍をおけないし、二つの車輪が四つの轍を作ることありません。福童を守り、年老いて死ぬまで嫁ぎません。あなたのご存命中ですら外出しませんでした。ましてあなたが亡くなったら、外出するなんて言わないでください。〔夫が言う〕お前は外出しない、人に会わないでいると言うが、私はいくつかに会わねばならないことをざっと話すから、聞きなさい。〔妻が言う〕お話しください。

ここに挙げたのは全く同じ場面であるが、『元刊雜劇』の妻の言葉に比べると、『元曲選』は貞節に対する意識が強調されている。なお女性の貞節に関するこのようなテキスト間の違いは、「拜月亭」においても確認することができる⁷⁾。

このように『元刊雜劇』からうかがえる元代女性の貞節観は厳格なものではなく、またその発言には男女間で温度差がみられる。舞台上で、女性が、意中の男性への率直な気持ちや二人の親密な関係を語る事が容認されていたことから、元代は女性の貞節を意識していなかったわけではないが、締め付けが庶民レベルではまだ弱かったといえる。

三 おわりに

『元刊雜劇』の特色として、女性の貞節観念からの逸脱を読み取ることができる。『元刊雜劇』によれば、私通や貞節を強調するのは女性よりもむしろ男性のほうで、性に奔放な女性の芝居が舞台上で上演されていたと考えられる。

注

- 1 澤田瑞穂「清代歌謡雜稿」(『中国の庶民文藝——歌謡・説唱・演劇——』、東方書店、一九八六年)、三十頁の記述。
- 2 『元典章』卷十八戸部 卷四官民婚「命婦夫死不許改嫁」(文海出版社、一九六四年)、二十五頁の記述。
- 3 下見隆雄「藍鼎元『女學』の研究(十二)」(『東洋古典學研究』第二十四集、二〇〇七年)。
- 4 古本戲曲叢刊編輯委員會編『古本戲曲叢刊』四集(商務印書館、一九五八年)所収。
- 5 仁井田陞集 幼方直吉・福島正夫編『中国の伝統と革命』二(平凡社、一九七四年)、汪玟玲『中国婚姻史』(上海人民出版社、二〇〇一年)などを参照。
- 6 徐沁君『新校元刊雜劇三十種』(中華書局、一九八〇年)、九七頁を参照。
- 7 拙論「『拜月亭』における女性像の変容」(『九州中国学会報』第四三卷、二〇〇五年)。